

洛西・洛東エリアにおける観光スポットイメージと回遊行動特性に関する分析

Analysis of The Relation between Visitors' Image of Sightseeing Spots and Their Excursion Patterns : A Case Study in Raku-sai and Raku-tou Area of Kyoto

西井 和夫**, 土井 勉***, 川崎 雅史****, 西野 至*****, 服部 純司*****

By Kazuo NISHII **, Tsutomu DOI ***, Masashi KAWASAKI ****,
Itaru NISHIINO ***** and Junji HATTORI *****

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

今後わが国は、人口減少社会を迎え、都市における定住人口も減少すると予測される。こうした状況において都市の活力の維持・増大のためには、観光目的などの来訪者の増加を促進する集客政策あるいはビジュアル・インダストリーが有効である¹⁾。また、「都市の集客性」という課題に取り組むとき、地域経済への波及効果を考慮すれば、当該都市への来訪者数とともに、訪問地での滞在時間を増加させることが必要で、そのための適切な施策を用意しておくことが重要と考えられる²⁾。いわば、「集客性」とは、以下の基本式でとらえることができる。

$$(\text{集客性}) = (\text{来訪人数}) \times (\text{滞在時間})$$

ここで、来訪人数の増加にとっては観光地(エリア全体)や施設(観光スポット)の魅力向上策の検討が必要となり、一方滞在時間の増加のためには、エリア内で来訪する観光スポット数の増加とこれらを結んだ歩行回遊性の向上策の検討が不可欠といえる。

本研究ではこうした問題意識を背景として、わが国における有数の歩行回遊型観光地区である、京都洛西エリアの嵐山嵯峨野地区と洛東エリアの東山地区を取上げ、これら2エリアにおける観光客の観光スポットに関するイメージ(魅力度)評価データと回遊行動の実態データにもとづき、エリアイメージ評価と回遊行動特性の各々の特徴を明らかにする。またこの2エリアの中に存在する主要な観光スポット形成の歴史的背景の検討を行い、それらがエリアイメージを重視し、これ

を生かす方向で整備が行われてきたことを確認する。

そして、こうした観光回遊の実態分析と回遊の目的となる観光スポットのイメージおよびその歴史的背景の分析という2方向より回遊行動とエリアイメージの関係をとらえ、それにもとづき今後の魅力的な回遊路整備のあり方を明らかにしていくことにする。(図-1)

(2) 既存の研究と本研究の位置づけ

歩行回遊の行動と地域計画に関する研究はそれほど多くない。例えば、歩行の中でも散策行動を取上げたものとして和田ら(1997)³⁾のものがあ、観光客の回遊行動についての研究には、橋本ら(1997)⁴⁾のものがあ。また最近の都心地区における歩行回遊行動調査については木下ら(1999)⁵⁾の研究がある。これらの研究は、主に歩行回遊の行動分析に関するものである。一方、本研究では、このような回遊行動を促す観光スポットに関するイメージ評価も行い、回遊行動分析の視点をイメージ分析にまで広げることを意図した点が特徴といえる。

また、観光地のエリアイメージに関しては、これまで

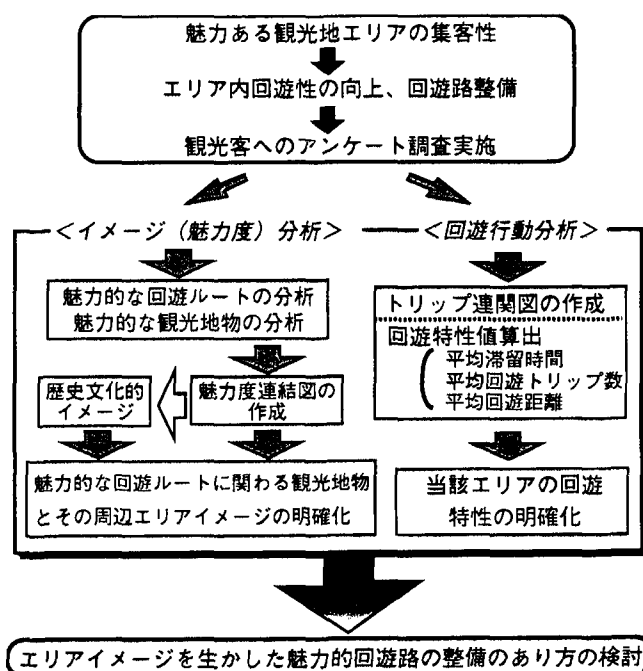


図-1 本研究の全体フロー図

Keywords : 観光交通、 回遊行動、
エリアイメージ、歴史文化イメージ

** 正会員 工博 山梨大学工学部土木環境工学科
(山梨県甲府市武田4-3-11、Tel & Fax. 055-220-8533)

*** 正会員 工博 (財) 千里国際情報事業財団

**** 正会員 工博 京都大学大学院工学研究科

***** 正会員 山梨大学工学部土木環境工学科

***** 学生員 山梨大学大学院

筆者ら (1998) ⁶⁾ によって知覚マッピングやイメージ評価尺度を用いたイメージ構造の空間布置分析が行われてきた。本研究もエリアイメージのとらえ方については基本的に従来の研究を踏襲しているが、実際の交通行動パターンとの対比を考えることでエリアイメージ形成との関連性を見出し、イメージ構造の把握段階から一步進めて回遊路整備というデザインの検討段階に入る糸口にしたいと考えている。

2. 観光地イメージ / 回遊行動調査の概要と
基礎集計分析

(1) 調査の概要

本調査は、1999 年 5 月の連休期間に京都の洛西と洛東の 2 エリアにおいて観光客を対象とした手渡し郵送回収方式によってなされた。ここで、本調査の目的は、調査日当日における観光客の周遊行動の実態を把握することと、観光客が抱く周遊ルートに関するイメージ評価である。具体的には、以下の調査項目がある。図 -2 は、本調査における主な調査項目であり、個人属性、調査日周遊行動（トリップチェーン）特性、そして魅力的スポットとルート等から構成されている。

具体的な配布スポットは、対象エリア内スポット分布と集客性からみて代表的な数箇所を絞り込んだ結果、洛西エリアは渡月橋、天竜寺、大覚寺、金閣寺、東映太秦映画村、松尾大社の計 7 箇所であり、洛東エリアは、銀閣寺、南禅寺、平安神宮、知恩院、清水寺、三十三間堂の 6 箇所である。

ここで、洛西エリア 1000 サンプル、洛東エリア 1000 サンプルを配布した結果、洛西エリアは 312 サンプル回収で、回収率 31.0% であった。同様に洛東エリアは 278 サンプル回収で、回収率 27.8% であった。

また、表 -1 は、各エリアの有効サンプルについての

[個人属性]

- 性別
- 年齢
- 就業の有無
- 居住地（府県／市）
- 京都観光の頻度

[調査日の周遊行動]

- 旅行形態（宿泊、日帰り）
- 京都までの交通手段
- 当該エリアでの交通手段／滞在時間
- 同伴者
- 被験者の周遊ルート
- 立ち寄り箇所／時刻（到着・出発）

[周遊ルートに対するイメージ評価]

- 最も魅力的と考えている観光スポット
- 最も魅力的と考えている周遊ルート
- 形容詞対評価軸を用いた S D 評価

明るい・暗い
古風な・現代的な
活動的な・落ち着いた
聖的な・庶民的な
重厚な・軽快な
人工的な・自然的な

図 -2 主な調査項目

個人属性、旅行形態をまとめたものである。

これより、性別構成をみると、両エリアとも女性の割合が若干多くなっているが、エリア間の違いは見られない。職業構成では、両エリアで会社員・自営の割合が多くなっている。また、主婦と学生においてエリア間に差異があった。このことは年齢構成にも影響しており、20 代、30 代の若年層の構成比に差異があることがわかる。

次に旅行形態を眺めると、入洛交通手段では、JR 新幹線利用の来訪者が両エリアに共通して最も多い。次いで洛西では、私鉄（25.0%）、自家用車（21.1%）、JR 在来線（13.2%）と続くのに対して、洛東では、自家用車（27.8%）、JR 在来線（18.3%）、私鉄（17.3%）となっており、両エリアの私鉄利用割合（車利用割合）に差異があることがわかる。エリア内交通手段では、両エリアとも徒歩の占める割合が非常に高く、特に洛西エリアは、主として徒歩で各観光スポットを巡る歩行回遊型の観光地であり、それを補完する形で鉄道及びバス等の公共交通がエリア内利用交通手段として用いられている。

(2) 魅力的観光スポット・ルート連結図

次に、アンケート調査によって得られたデータをもとに観光客が各エリア内のスポットやルートに対して抱くイメージ（魅力度）評価の集計結果について考察する。表 -2 は、魅力的な観光地物を指摘数の多い順に列挙したものである。これより、洛西エリアでは、上位 10 位（大覚寺、天竜寺、金閣寺、渡月橋、東映太

表 -1 サンプルプロフィール

エリア内交通手段			洛西	洛東
徒歩			45.2%	42.1%
自転車			3.2%	1.3%
レンタサイクル			2.6%	0.2%
路線バス			14.1%	22.0%
自家用車			7.8%	10.3%
タクシー、ハイヤー			7.0%	15.1%
J R 在来線			4.0%	2.1%
阪急電鉄			5.4%	1.3%
京福電鉄			7.6%	0.6%
貸切観光バス			1.0%	0.8%
自動 2 輪、原付			0.4%	0.2%
レンタカー			0.4%	0.2%
その他			1.2%	4.2%
計			100.0%	100.0%

入洛交通手段			洛西	洛東
自家用車			21.1%	27.8%
JR 新幹線			29.6%	28.2%
JR 在来線			13.2%	18.3%
私鉄			25.0%	17.3%
路線バス・ハイウェイバス			4.3%	5.3%
貸し切り観光バス			1.6%	0.4%
タクシー・ハイヤー			0.3%	1.4%
その他（二輪）			4.9%	1.4%
計			100.0%	100.0%

年齢	洛西	洛東
10代	2.9%	5.0%
20代	20.0%	25.8%
30代	21.0%	15.1%
40代	24.5%	24.1%
50代	20.0%	20.5%
60代	10.3%	7.2%
70代	1.3%	2.2%
計	100.0%	100.0%

就業の有無	洛西	洛東
会社員、自営	66.2%	66.7%
主婦	17.2%	13.2%
学生	4.9%	8.4%
その他	11.7%	11.7%
計	100.0%	100.0%

秦映画村、華厳寺、嵐山周辺、竹林、竜安寺、松尾大社)までで、全体の56.2%を占めているのに対して、洛東エリアでは上位10位(清水寺、銀閣寺、南禅寺、知恩院、三十三間堂、永観堂、哲学の道、国立博物館、青蓮院、高台寺)までで、全体の79.5%を占めていた。

この指摘数割合とは、観光客がそれぞれの観光スポットを最も魅力的であると指摘しているかの全体に対する割合を示し、洛西エリアは魅力度評価がややばらつきをもつ傾向にあり、一方洛東エリアは、「清水寺」への集中度が目立ち、「銀閣寺」「南禅寺」とともに、複数の代表的な観光スポットがエリアイメージ形成の核的役割をもっているのが特徴といえる。

次に観光客が抱く魅力的ルートについても観光スポットと同様に回答させ、2つの観光スポット間のリンクの連結性の太さ(定義式参照)として指標化し、前述の観光スポット指摘数割合とともに、魅力的なルート連結図として作成してみた。図-3および図-4は、洛西と洛東の2エリアにおける観光客が魅力的と評価しているルートの連結関係を表したものである。

この連結図において、地物と地物を結ぶ線の太さは観光客が選んだ魅力的な周遊ルートの連結性の強さを表わしており、視覚的に捉えやすいよう工夫してある。また、地物の布置は実際の地図上の位置関係を考慮し、さらに地物を囲む円の大きさは各観光地

<定義式>

魅力的な周遊ルート連結性 (R_{ik}):

$$M_{ik} = N_{ik} + N_{ki} \quad R_{ik} = M_{ik} / \sum_{i=1}^{l-1} \sum_{k=i+1}^l M_{ik} \quad (i \neq k, i=1, 2, \dots, l-1)$$

N_{ik} : ある観光地物 (i 番目) から、魅力的な観光ルートと選定された観光地物 (k 番目) の出現回数

表-2 魅力的な観光スポット (洛西・洛東)

順位	観光地物	割合	累積	順位	観光地物	割合	累積
1	大覚寺	10.1%	10.1%	1	清水寺	23.9%	23.9%
2	天竜寺	9.1%		2	銀閣寺	12.0%	
3	金閣寺	8.0%		3	南禅寺	11.6%	
4	渡月橋	7.6%		4	知恩院	8.4%	
5	東映太秦映画村	4.7%		5	三十三間堂	8.0%	
6	華厳寺	4.0%		6	永観堂(禅林寺)	5.2%	
7	嵐山周辺	3.6%		7	哲学の道	3.6%	
8	竹林	3.3%		8	京都国立博物館	2.8%	
9	竜安寺	2.9%		9	青蓮院	2.4%	
9	松尾大社	2.9%		10	高台寺	1.6%	
11	中之島公園	2.5%		10	平安神宮	1.6%	
11	大河内山荘	2.5%	56.2%	10	祇園周辺	1.6%	79.5%
11	トロコ列車	2.5%		13	仁和寺	1.2%	
14	清水寺	2.2%		13	広隆寺	1.2%	
15	広隆寺	1.8%		13	金閣寺	1.2%	
15	野宮神社	1.8%		16	円山公園	0.8%	
15	化野念仏寺	1.8%		16	將軍塚	0.8%	
15	保津川下り	1.8%		16	三年坂(産寧坂)	0.8%	

魅力的な観光スポット指摘数割合 (S_i):

$$S_i = \frac{i \text{ スポットを最も魅力的と指摘した人数}}{\text{観光客総数}} \times 100\%$$

物における魅力度の評価の大きさに対応している。

これより、洛西エリアでの魅力度の評価が高かった「渡月橋」「天竜寺」「大覚寺」「金閣寺」は、地理的にも近い位置関係にある各々が連結しあったり、魅力度が少し低めの観光地物と結びついて、多種多様な連結関係にあることがわかる。また、この図より、魅力的な周遊ルートは、「嵐山嵯峨野地区の地物」を含むルートと「金閣寺」を含むルートの2つに大別できることがわかる。また、「渡月橋」「大覚寺」「天竜寺」は、それぞれを中心とした魅力的なルートが比較的明

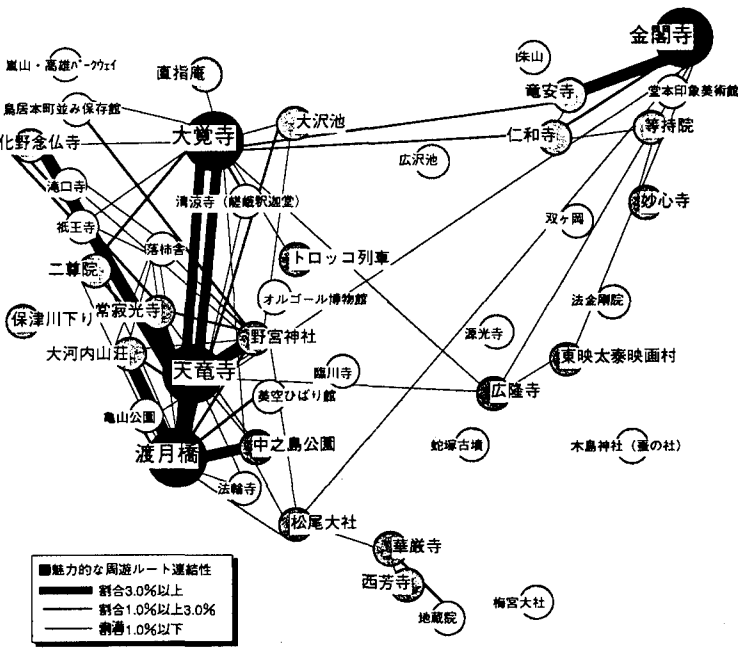


図-3 魅力的なルート連結図 (洛西エリア)

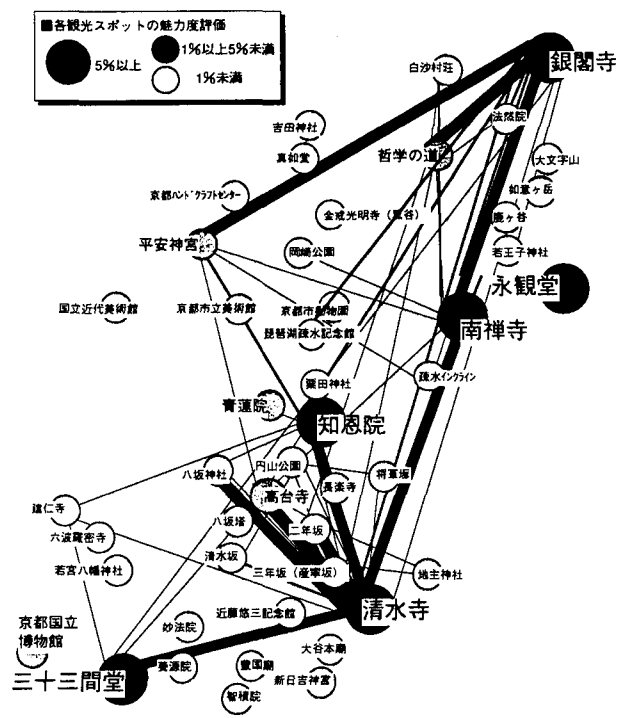


図-4 魅力的なルート連結図 (洛東エリア)

確に現われており、洛西の中で代表的な回遊エリアとして位置づけられている。これに対して、「金閣寺」は、これらとは独立した魅力的なルートの一つを形成している。

一方、図-4に示した洛東エリアの魅力的な周遊ルートの連結図を眺めてみよう。このエリアは魅力度の評価が高かった地物が、「清水寺」「銀閣寺」「南禅寺」「知恩院」「三十三間堂」「永観堂」のように拠点が複数あるのが特徴である。ここで「永観堂」に着目すると、顕著な連結関係はみられなかった。これは「永観堂」の北方に「銀閣寺」、南方に「南禅寺」という共に魅力度の高い地物が点在し、両者を結ぶルートは魅力的なルートとして最も高い評価がなされている。そのため、両観光スポットの間にある「永観堂」は魅力的なルートとしての起点あるいは終点にはなり得なかったものと考えられる。

「永観堂」以外の魅力度の高い観光スポットは、やはり各々が連結しあい、魅力度が少し低めの観光スポットにも連結していることがわかる。洛東エリアにおける魅力的な周遊ルートの代表的なものを挙げれば、「清水寺ー二年坂・三年坂」を含むルート、「知恩院ー八坂神社・円山公園」を含むルート、「銀閣寺ー哲学の道」を含むルートの3つである。

ここで、洛西エリアと比較してみると、洛東エリアは連結数の多い観光スポットが多い。また、「哲学の

道」「南禅寺」「三十三間堂」「銀閣寺」などの連結関係は、洛西エリアと比べて、隣接する魅力的ルートとも連結するようなある程度の地理的広がりを読むことができる。

以上の魅力的な周遊ルートの連結図より、全体的には魅力的と評価されている観光スポットは周遊ルートにおける連結関係も多様であり、当該エリアの連結図において強い連結性を示している。また、連結の地理的広がりという点で、洛西エリアはエリア内の特定観光スポット（渡月橋・天竜寺）の周辺で比較的まとまっているのに対して、洛東エリアはエリア全体で複数の拠点となるスポットが存在し、それらと各々の周辺の地物との連結関係が特徴である。

3. 回遊行動に着目した観光スポット間の連結性分析

ここでは、観光客が実際に各エリア内をどのように回遊しているかの実態把握を歩行回遊特性とトリップ連関図の2点から明らかにするとともに、その結果を踏まえた歩行回遊エリアの広がりについて考察していくことにする。まず、各エリアでの徒歩による回遊行動について、2施設間の移動を「回遊トリップ」、その歩行距離を「回遊歩行距離」、全移動の回数を「回遊トリップ数」と定義する。また、歩行距離の算出にあ

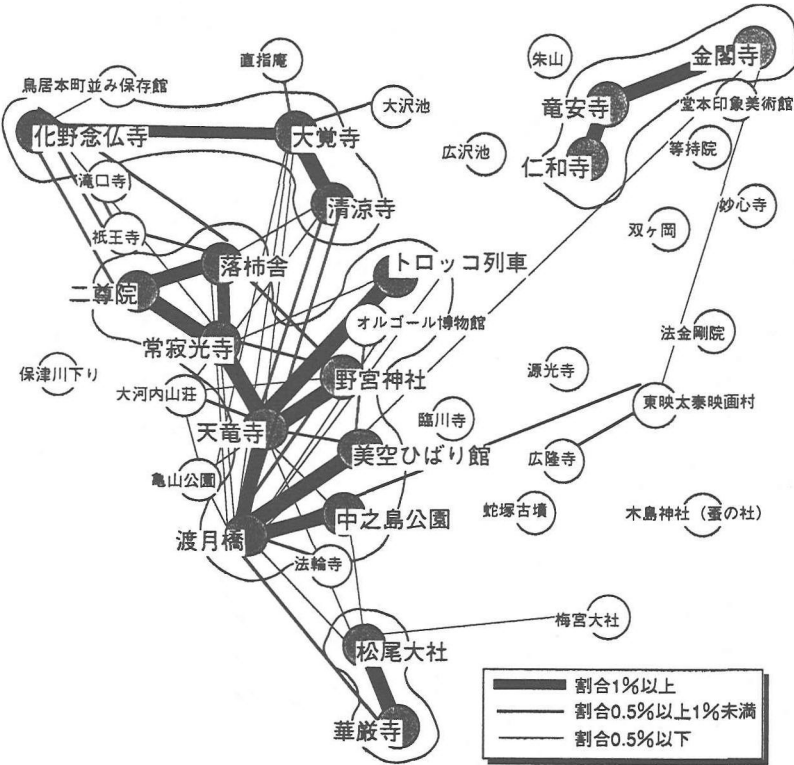


図-5 トリップ連関図（洛西：全サンプル）

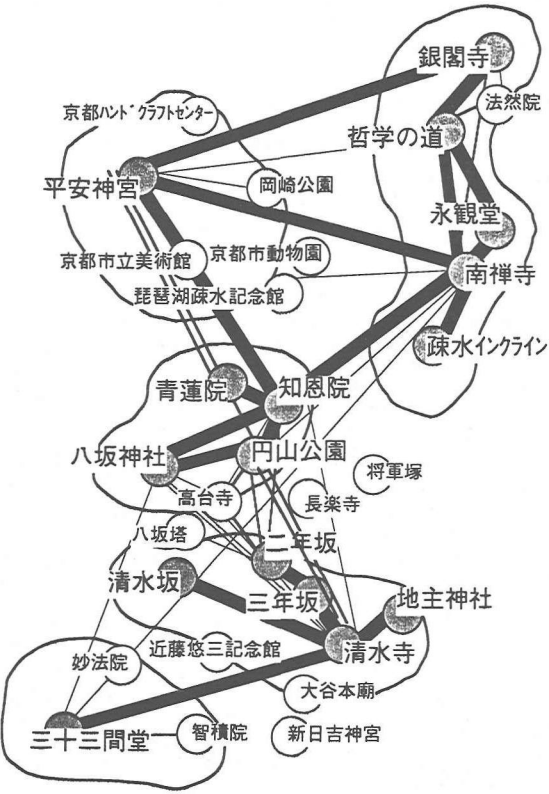


図-6 トリップ連関図（洛東：全サンプル）

表-3 歩行回遊行動特性値（洛西・洛東）

徒歩のみ	有効 サンプル数	一箇所あたりの 平均滞在時間	平均回遊 トリップ数	平均滞在 時間	平均回遊 距離	標準偏差
洛西エリア	87	56.8分	3.06トリップ	173.8分	590.1m	359.7m
洛東エリア	41	36.8分	5.56トリップ	204.6分	554.6m	449.5m

たっては観光客が実際に行動した経路を忠実に把握するのは困難であったため、来訪した観光スポット（回遊距離算出にあたり、昼食をとったお店や駅は便宜上省略した）から場所を特定し、地図上での直線距離として推計した。

表-3、洛西エリアの場合で、1箇所あたりの平均滞在時間は56.8分、平均回遊トリップ数は3.06トリップ、平均回遊距離は590.1mという結果となった。一方、洛東エリアでは、1箇所あたりの平均滞在時間は36.8分、平均回遊トリップ数は5.56トリップ、平均回遊距離は554.6mという結果となった。各エリアを比較すると、平均トリップ数は、洛東エリアの方が概ね2.5トリップ多く、観光客は徒歩で多様な回遊をしているのに対して、洛西エリアでは平均回遊トリップ数が相対的に少ないものの一箇所での滞在時間が長くなる傾向にある。

次に、図-5、図-6は各エリアにおけるトリップ連関図であり、これは各エリア内観光スポットを訪問するトリップチェーンデータを用いて観光スポット間の結びつきの強さを表すものである。このトリップ連関図作成では、以下の定義式を用いて連結性の算定を行う。すなわち、1トリップチェーン内の観光スポットのデータに対してそれぞれ1チェーンの生起に対する寄与度（重みづけ）を考慮する。この寄与度は、1チェーン内の観光地物及びベース（ $n+1$ 個）から2つを選ぶときの組合せ数（ ${}_{n+1}C_2$ ）の逆数として定義できるので、連結性指標は次式で求められる。

<定義式>

$$\text{連結性指標の定義式} = \text{チェーン数} \times \frac{1}{{}_{n+1}C_2}$$

各エリアのトリップ連関図の特徴とそれにもとづく回遊エリアとしてのまとまりについて概観すれば以下ようになる。

●洛西エリア（図-5）

「天竜寺」や「渡月橋」などの観光スポットを含む嵐山嵯峨野地区は、やはり洛西エリア内の周遊の拠点として位置づけられる。一方、「大覚寺」は、「清涼寺」「化野念仏寺」「大沢池」と連結関係が強く、嵐山嵯峨野地区のまとまりとはその間にあるいくつかの観光スポットを介して連結している関係にある。回

遊空間のとらえ方として両者は一体と考えるべきかは議論の余地があるが、ここでは2つに区分してとらえることとした。なお洛西エリアでは、この他に地理的に少し離れているために、「金閣寺」「竜安寺」「仁和寺」の独立したトリップ連関がある。

●洛東エリア（図-6）

洛東エリアでは、エリア内周遊行動の中心的な役割を担う観光スポットが多数存在し、それらを軸に南北に広がるこのエリアを5ブロック程度に分割できる回遊空間を読取ることができる。次に、トリップ連関を徒歩によるサンプルに限定して作成し、これに、表-3で示した歩行回遊行動特性を考慮して、2エリアでの代表的な歩行回遊エリアの広がり回遊路を含めて表現してみることにした。

洛西エリアにおいて徒歩のみによる回遊エリアの広がりを徒歩によるトリップ連関図から求めると、「天竜寺・渡月橋周辺」「大覚寺・化野念仏寺周辺」そして、「金閣寺周辺」の3エリアを抽出できた。このうち、図-7は、「天竜寺・渡月橋周辺」を取上げ、トリップ連関性が強い観光スポットおよび現行の歩道をもとにした回遊路の一例を示したものである。

これより、景観上もすぐれた「渡月橋・嵐山公園」を起点として「天竜寺」「常寂光寺」「落柿舎」への回遊路があり、さらに足を伸ばせば「嵯峨釈迦堂」、そして「大覚寺」まで続く回遊路の設定が可能といえる。また、この「嵐山嵯峨野地区」は鉄道ターミナルからも近いため、JR 嵯峨、阪急嵐山の駅を回遊起点とする回遊路も成立し、観光スポットも多くあるので多様な回遊行動を楽しむことが期待できる。

一方、洛東エリアについては、徒歩によるトリップ

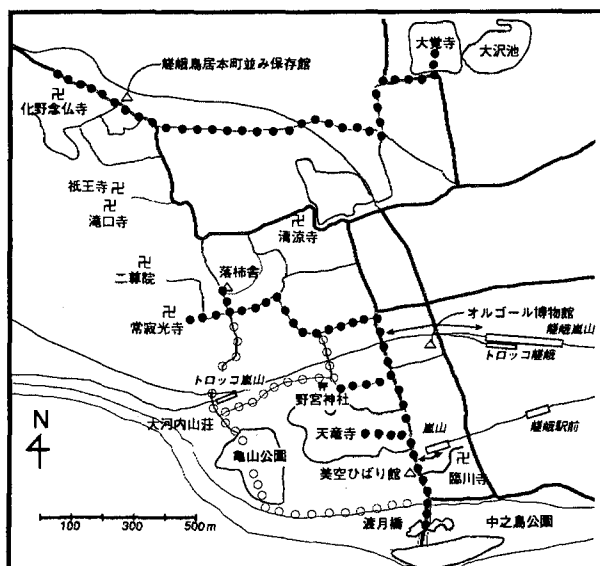


図-7 回遊路の一例（洛西：天竜寺・渡月橋周辺）

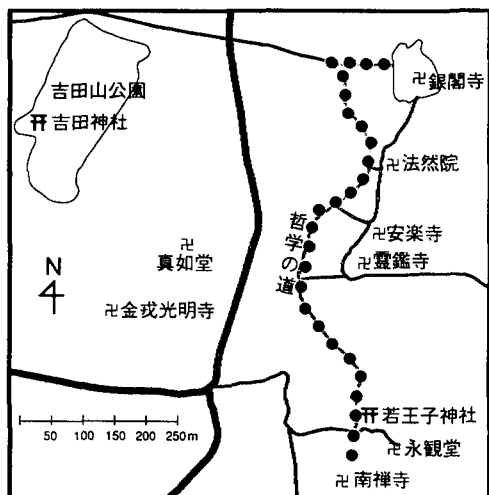


図-8 回遊路の一例（洛東：銀閣寺・哲学の道周辺）

連関図から「銀閣寺・哲学の道周辺」「知恩院・円山公園周辺」「清水寺・二年坂周辺」の3エリアが抽出できた。図-8、図-9は、そのうち2エリアについての回遊路の例を示している。図-8より、「銀閣寺」から「永観堂」を経て「南禅寺」に至る「哲学の道ルート」は、現在でも東山観光の代表的な周遊ルートであり、疎水沿いの散策道を銀閣寺方面からゆっくり南下するにつれて連続的な景観の変化を楽しむことができる魅力的なルートといえる。また、図-9に示した「清水寺・三年坂・二年坂地区」は、「清水寺」への起伏ある参道が、景観のダイナミックな変化と味わいを与えているのが特徴といえる。

4. 歴史文化的イメージと観光スポット

(1) 嵐山嵯峨野の歴史文化的イメージ

洛西エリアにおいて、「嵐山嵯峨野地区」は魅力的なルート連結図あるいはトリップ連関図からみても、「渡月橋」や「天竜寺」などの代表的観光スポットを拠点として、エリア一帯にある多くの観光スポットを巡る歩行回遊型の観光地であるといえる。

しかも、これらの観光スポットは嵐山嵯峨野を舞台にした多様な物語と密接に関係している（表-4）。

「源氏物語」をはじめ、これらの物語は、平安時代の男女の悲恋あるいは哀愁をテーマにしたものが多く、各施設も物語その背景にある歴史文化的イメージとの関連性が深い。また、こうした物語や歴史文化イメージと個々の施設の集積が嵐山嵯峨野の地域全体のエリアイメージを形成していると考えられる。

こうした観光スポットで創建当時のままの寺院は別にして、嵐山嵯峨野に関連するイメージを今に保持してい

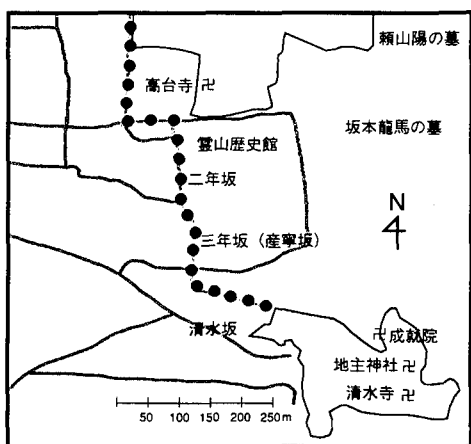


図-9 回遊路の一例（洛東：清水寺・二年坂周辺）

る多くの観光スポットは、一体いつ、誰がどのような意図で整備をしたのであろうか。

洛西エリアの観光スポットの中から、20箇所の観光スポットを対象として、その形成過程を表-4のように整理した。ここでは、施設の成立時期と明治時代以降でそれが再興（場所が旧地から移動したり、一旦は荒廃したものを作り直した場合）、再生（存続はしていたが、明治以降に大きく手を入れられたもの）された時期を記している。さらに、ここでいう再興・再生の他に、存続（創建当時からの姿を残していると考えられるもの）、新設（明治時代以降に新たに整備されたもの）の4つの視点で各観光スポットを分類整理している。

これらの観光スポットのうちで存続に分類されるものは6箇所であり、全体の30%、残りの70%は明治時代以降に手を入れられたもので、14箇所中で7箇所が新設、再興4、再生3箇所となっている。

これより、平安時代の悲恋の舞台というエリアイメージがあるものの、観光スポット自身が平安時代から連綿

表-4 観光施設の歴史的推移（洛西エリア）

観光施設	成立時期	再興/再生時期	分類	記号
法幢寺	713（和銅6）		継続	■
渡月橋	713（和銅6）頃	1934（昭和9）	存続・再生	□
二尊院	836（承和3）		継続	■
大覚寺	876（貞観18）		継続	■
清涼寺	987（寛和3）		継続	■
宝篋院	平安時代	1891（明治24）	存続・再生	□
化野金仏寺	平安時代	明治36・7年頃	存続・再生	□
野宮	不明	1907（明治40）	存続・再生	□
天竜寺	1345（貞和1）		継続	■
常寂光寺	寛永年間（1624～44）		継続	■
直指庵	1646（正保3）	1880（明治13）	荒廃・再興	●
落柿舎	1600年代後半	1895（明治28）	荒廃・再興	●
願成庵	1772～81（安永）	1901（明治34）	荒廃・再興	●
祐王寺	江戸時代	1895（明治28）	荒廃・再興	●
瀬口寺	不明	昭和初期	荒廃・再興	●
嵐山公園	1910（明治43）		新設	○
中ノ島公園	1910（明治43）		新設	○
大河内山荘	1954（昭和39）		新設	○
トロッコ列車（嵯峨野観光鉄道）	1991（平成3）		新設	○
京都嵐山オルゴール博物館	1993（平成5）		新設	○
京都市嵯峨鳥居本町並み保存館	1993（平成5）		新設	○
美空ひばり館	1994（平成6）		新設	○

注）■継続、□存続・再生、●荒廃・再興、○新設

と変わらずに維持されているのではなく、多くは明治時代以降に形成されたものであることがわかる。ただ、その場合でも再興・再生のものはエリアイメージを壊さないように、あるいは育成するように十分慎重な配慮がなされている。また新設されたものの、多くについてもエリアイメージを意識した整備がなされている。

「嵐山嵯峨野地区」の周辺の歴史・文化的イメージについて見れば、化野念仏寺周辺の愛宕街道の町並み約600mは、嵯峨野が持つ田園的町並みから都市的性格町並みへの姿を変える過程的景観が残されている。そのために、1979（昭和54）年に鳥居本伝統的建造物群保存地区として都市計画決定がされている。この結果、伝統的建造物が町並みイメージの保存継承に寄与している。

さらに野宮周辺から小倉山一体は、小倉山歴史的風土特別保存地区に含まれているために、竹林や田園風景が保存されている。これらの法的な網によって、このエリアにある観光スポットと回遊路は嵯峨野らしさが保存されることになり、歩いて訪問する人々にとっては一層嵯峨野の雰囲気を楽しむことができるものとなっている。

(2) 洛東エリアの歴史文化的イメージ

次に、洛東エリアにおいて魅力的な観光スポットの上位10位について、その成立過程をまとめたものが表-5である。

11箇所 of 観光スポットのうち明治以前に成立し、それが継続しているものが「清水寺」など8箇所、明治以降に成立したものが「哲学の道」など3箇所であり、洛西エリアに比べると、再興や再生されたものがないことが特徴である。これは、「落柿舎」や「野宮神社」などのような小さな観光スポットが多く集積している洛西エリアと比べ、本山級の寺院が多く集積し、そのため観光客にとっての注目度が集中しているというのがこのエリア

表-5 観光施設の歴史的推移（洛東エリア）

観光施設	成立時期	再興/再生時期	分類	記号
清水寺	798（延暦17）		継続	■
銀閣寺	1482（文明14）		継続	■
南禅寺	1291（正応1）		継続	■
知恩院	1234（文暦元）		継続	■
三十三間堂	1164（長寛2）		継続	■
永観堂（禅林寺）	863（貞観5）		継続	■
哲学の道	1970（昭和45）		新設	○
京都国立博物館	1897（明治30）		新設	○
青蓮院	1150（久安6）		継続	■
高台寺	1606（慶長11）		継続	■
平安神宮	1895（明治28）		新設	○

注）■継続、□存続・再生、●荒廃・再興、○新設

の特徴である。
こうした洛東エリアの観光スポットの中でも創建時から継続しているものから、最も魅力的と評価されている上位3つの観光スポット、新設についても上位である「哲学の道」を取上げ、各々が持つ歴史文化的な背景について考える。

まず「清水寺」は、洛東エリアで最も魅力ある観光スポットとされているが、「清水の舞台」や音羽の滝で有名であり、境内は世界文化遺産に登録されている。平安時代には「更級日記」や清少納言が参籠した記事があり、古くから信仰の対象であった。中世には西国三十三所観音の十六番札所となり、多くの参詣客を集めている。その霊験は謡曲「田村」や「熊野（ゆや）」、落語「景清」などの物語の題材にもなっている。現在も毎年「京都市観光調査年報」で第1位の訪問地として京都市内で最も多くの観光客を集めている。またその参道の「二年坂」、「産寧坂（三年坂）」一帯は、江戸時代末から大正時代にかけて建てられた町家群が残り、「産寧坂伝統的建造物群保存地区」に指定されて、京都らしい雰囲気が保存された回遊路が形成されている。

次に、「銀閣寺」は、室町時代に足利義政が建立したものであり、洛東エリアでは「清水寺」と並んで世界歴史遺産にも登録されている。義政は義満の「北山金閣寺」に劣らないものとして「銀閣寺」を構想したが、結局果たせなかったと言われている。しかしこの地で営まれた文化はわが国の美術史上は東山時代と呼ばれ教科書にも掲載される程洗練されたものであった。

そして「南禅寺」は、歌舞伎「楼門五三桐」で盗賊石川五右衛門が三門に住んでいたことで有名であるが、三門は五右衛門死後30年ほどして建てられたものである。境内には琵琶湖疏水の一部として1890（明治23）年に竣工したレンガ造りの水路閣があり、名利と近代的土木構造物とが調和した景観を形成している。

「哲学の道」は、元来は水路閣と同様1890（明治23）年の疏水完成時に管理用道路として整備されたものであるが、1970（昭和45）年に歩行者専用道路として整備された。ここに敷設されている敷石は丁度廃止された市電の敷石を利用したものである。この辺りは京都大学にも近く、近隣に住んでいた京都学派の哲学者西田幾多郎や田辺元らが思索にふけりながら散策をした道といわれ、道の中程には西田の歌を刻んだ碑もある。ドイツのDenken Straaseにちなんで「哲学の道」と名付けられた。道の北端は「銀閣寺」から始まり南は「永観堂」「南禅寺」に至る約2kmであり、沿道には「永観堂」をはじ

め多くの観光スポットがある。1986（昭和61）年には建設省と「道の日」実行委員会によって「日本の道100選」にも選定されている。また道は東山の中腹を巡り、京都市内が一望できる優れたルートであるとともに多く桜や紅葉があり、四季を通じて多くの人々を集める優れた回遊路になっている。

5. おわりに

本論文では、洛西・洛東エリアにおいて観光客が抱く魅力的スポットあるいは魅力的ルートのイメージ評価と実際のエリア内回遊行動特性の関係、観光スポット形成の歴史的背景・特徴への考察を含んだ回遊エリアについて分析を行ってきた。ここでは、それらの結果を簡単に要約するとともに、本研究の最終的な目標である、「魅力ある回遊路整備のあり方の提案」に関連づけた考察をつけ加えておくことにする。

まず、本論文の前半部の魅力的ルート連結図とトリップ連関図から読取ることができるエリア特性については以下の点がわかった。

1) 洛西エリアは、観光スポットが多様で魅力度評価は分散するが、魅力的ルートの連結性およびトリップ連関図とも「嵐山・嵯峨野地区」の比較的狭い範囲（歩行回遊圏内）におさまっている。

2) 洛東エリアは、エリア全体の中で複数の観光スポットが魅力的な主要拠点として存在し、それを反映してその周辺の観光スポットとの連結・連関性が強いのが特徴である。

3) 上述の1)、2)のエリア特性は、エリア内の観光スポットの分布に依るところが大きい、エリア内交通アクセス性や徒歩圏の大きさといった交通条件の差異も影響していると考えられる。

ここでは、最終的には、洛西・洛東の各エリア内での回遊路整備のあり方への計画情報を得ることを目的としているので、1日全体の周遊行動（トリップチェーン）特性である第1トリップ出発地や最終トリップ到着地に着目した分析は実施していない。これについては、これまでの休日交通行動分析研究（参考文献8）参照）や周遊行動の目的地選択モデルの構築を通じてその関連性をさらに検討する必要がある。一方、エリア内での回遊の起終点に関しては、実際上は、マイカー観光では駐車場、それ以外ではターミナル施設が中心になるので、それらの拠点（ベース）とエリア内の観光スポット（ストップ）との関係に着目

した考察が今後の課題といえる。

次に、本論文の後半部では、歩行回遊エリアの設定ならびにそれを構成する代表的観光スポット形成の歴史的背景について考察した。それらより、以下の諸点がわかった。

4) 洛西エリアにおいては、回遊エリアとして「嵐山・嵯峨野地区」を設定できることを示した。これは、今回の観光客調査データより、魅力的であると評価されている観光スポットを中心として、まとまりのある回遊空間と判断でき、また物理的にも徒歩による回遊行動範囲内であることによる。

5) これに対して、洛東エリアでは、回遊エリアという面的な広がりというよりむしろ散策道や参道といった線的な回遊路であるが、「銀閣寺」から「南禅寺」に至る「哲学の道ルート」、および「清水寺から八坂神社に至る産寧坂・二年坂ルート」の2つが設定できることを示した。（なお、これら2ルートとも、魅力的ルート連結性ならびに徒歩によるトリップ連関性、さらには、これまでの当該ルートにかかわる観光スポット形成の歴史的背景との関係からみて望ましいと判断した。）

最後に、これからの回遊路整備のあり方について簡単に言及する。ただし、それらの多くは今後の具体的な検討を待たなければならない課題であることを断っておきたい。回遊路は、基本的に目的地までの移動に関する充実性よりも、むしろその間において連続的な景観変化・展開の面白さや（再）発見、非日常性への誘いといった変化や演出が必要といえる。そのためには、観光スポットだけでなく、観光順序を考慮して、散策道・休憩施設整備、寄り道・近道の整備、回遊路を取巻く景観要素の保全・修景デザインなどを考えていかねばならない。なお、本研究で取り上げた観光ガイド資料などには、いわゆる『おすすめルート』がしばしば掲載されているが、これと本分析で示した結果との関係についても今後詳細に検討すべき課題であると言える。とくに、『おすすめルート』の分類や定義方法に関しては、観光客のニーズ把握と回遊行動の魅力化に深く関係する重要な示唆を含むものと考えられる。

注)各観光スポットの来歴を調べるのに参考としたものは京都市：「京都修学旅行ハンドブック」,1998、嵯峨教育振興会：「嵯峨誌平成版」,1997、京都府観光連盟：「京都観光ガイド」,1995、竹村俊則：「昭和京都名所図絵4洛西」,1983、嵐山保勝会：「観光の嵐山」,1936、京都市：

「新選京都名勝誌」,1915.、秋里籬島：「都名所図絵」,1780,及び各観光スポットが発行している案内パンフレットである。

<参考文献>

- 1) 例えば、「大阪市観光基本政策への提言」(1996年、大阪市)、「名古屋市ビジターズ戦略ビジョン」(1998年、名古屋市)など。
- 2) 土井勉：都市間競争時代の賑わいあるまちづくり, FUSION.Vol.5, 宝塚まちづくり研究所, pp.26~30, 1999年
- 3) 和田章仁・章仁・材野博司：散策行動からみた散策空間の形成に関する考察, 都市計画 No.206, pp.59-67, 1997年

- 4) 橋本俊哉：「観光回遊論-観光行動の社会工学的研究」, 風間書房, 1997年。
- 5) 木下瑞夫・田雑隆昌・牧村和彦・浅野光行：都心地区における歩行者回遊行動調査とその有用性に関する研究, 土木学会論文集 No.625/IV-44, pp.161~170, 1999年
- 6) 西井和夫、棚橋美佐緒、川崎雅史、酒井弘：京都観光におけるエリアイメージ構造把握のための空間布置分析、土木計画学研究・論文集、Vol.15, pp.403-412, 1998
- 7) 土井勉、西井和夫、川崎雅史：嵐山嵯峨野エリアにおける観光回遊特性分析：観光スポットの歴史文化的イメージとの関連に着目して、土木計画学研究・講演集、No.22(1)、pp.311~314, 1999
- 8) 西井和夫：京都観光交通調査と分析、第34回土木計画学シンポジウム、pp.15~24, 1998.11

洛西・洛東エリアにおける観光スポットイメージと回遊行動特性に関する分析

西井 和夫、土井 勉、川崎 雅史、西野 至、服部 純司

本研究は、京都観光で代表的な洛西・洛東エリアを取上げ観光客が抱く魅力的なスポットやルートに対するイメージ評価と実際のエリア内回遊行動特性との関連性を明らかにすることを目的とする。具体的には、観光客アンケート調査データより魅力的なルートに関する観光スポット間連結性とトリップ連関性の両者を比較することにより、洛西・洛東の2エリアの各々の回遊エリアおよびその特徴を明らかにするとともに、その中に含まれる観光スポットの歴史・文化的イメージについても言及した。これらより、魅力的な回遊路として、洛西エリアでは「嵐山嵯峨野地区」、洛東エリアでは「銀閣寺・哲学の道ルート」「清水寺・二年坂ルート」の合計3ルートを提案している。

Analysis of The Relation between Visitors' Image of Sightseeing Spots and Their Excursion Patterns : A Case Study in Raku-sai and Raku-tou Area of Kyoto

By Kazuo NISHII ,Tutomu DOI , Masashi KAWASAKI, Itaru NISHIINO and Junji HATTORI

In this paper, visitors' image of Raku-sai and Raku-tou area of Kyoto is analyzed to identify which sightseeing spot and route they felt the most attractive. Their excursion patterns are also examined to represent the connectivity between spots that is defined by the reciprocal of the number of combination in a trip chain. This paper analyzes the relation between image of spots and the excursion patterns. Further, considering the historical and cultural background of the dominant spots, the desirable excursion districts in these areas are proposed : Arashiyama-Sagano district in Raku-sai, Ginkaku-temple and Tetsugaku-nomichi, and Kiyomizu-temple and Ninen-zaka districts in Raku-tou.
